

二つの絵から - 「時間と平衡感覚」について -

村上浩一

*

西洋絵画というと、我々はすぐに19世紀後半のセザンヌやルノワールを始めとするフランスの印象派の絵を思い浮かべる。このころは物理の世界では、古典物理学が完成した後であるが、さらに陰極線(電子線)、X線、放射線などの現象が発見され、それを解明しようとしたり、また、原子スペクトルを説明しようとしていた。まさに、20世紀のはじめに量子力学が誕生するまでの過渡期とこれらの絵は時を同じくして描かれたものであり、おもしろく感じられる。しかし、それより以前の西洋絵画にもすばらしい絵画が沢山あることを、かつて海外のいくつかの美術館を訪れてよくわかった。大学の私の居室にも古い絵画の絵ハガキを二点置いている。その一つはフェルメール(17世紀の画家)の「牛乳をそそぐ女」であり、もう一つはブリュエール(父の方; 16世紀の画家)の「イカサの墜落」である。

**

フェルメールの絵は一般に印刷物と本物を観るのでは落差が大きいといわれている。1982年の夏に初めてヨーロッパを訪れ、私の専門である「半導体中の不純物／格子欠陥」の国際会議に出席したときのこと。会場はオランダのアムステルダム大学であったので、アムステルダム国立美術館まで足を運んだ。そのときにフェルメールの作品四点を初めて観た。そのなかの「牛乳をそそぐ女」(<http://www.oir.ucf.edu/wm/paint/auth/vermeer/vermeer.milkmaid.jpg>)に予期していた通り見入ってしまった。



しばらくはその前から動けなかったのを覚えている。画面の左上の窓から射し込む北国の光の中で堂々たる体の女性によって牛乳がそそがれている。そんな、何ということはない日常的な光景である。色彩的には黄と青が効果的に使われ、光が描かれている。その中に静寂があり、"時"が止っているのを感じさせてくれる。そのため永遠

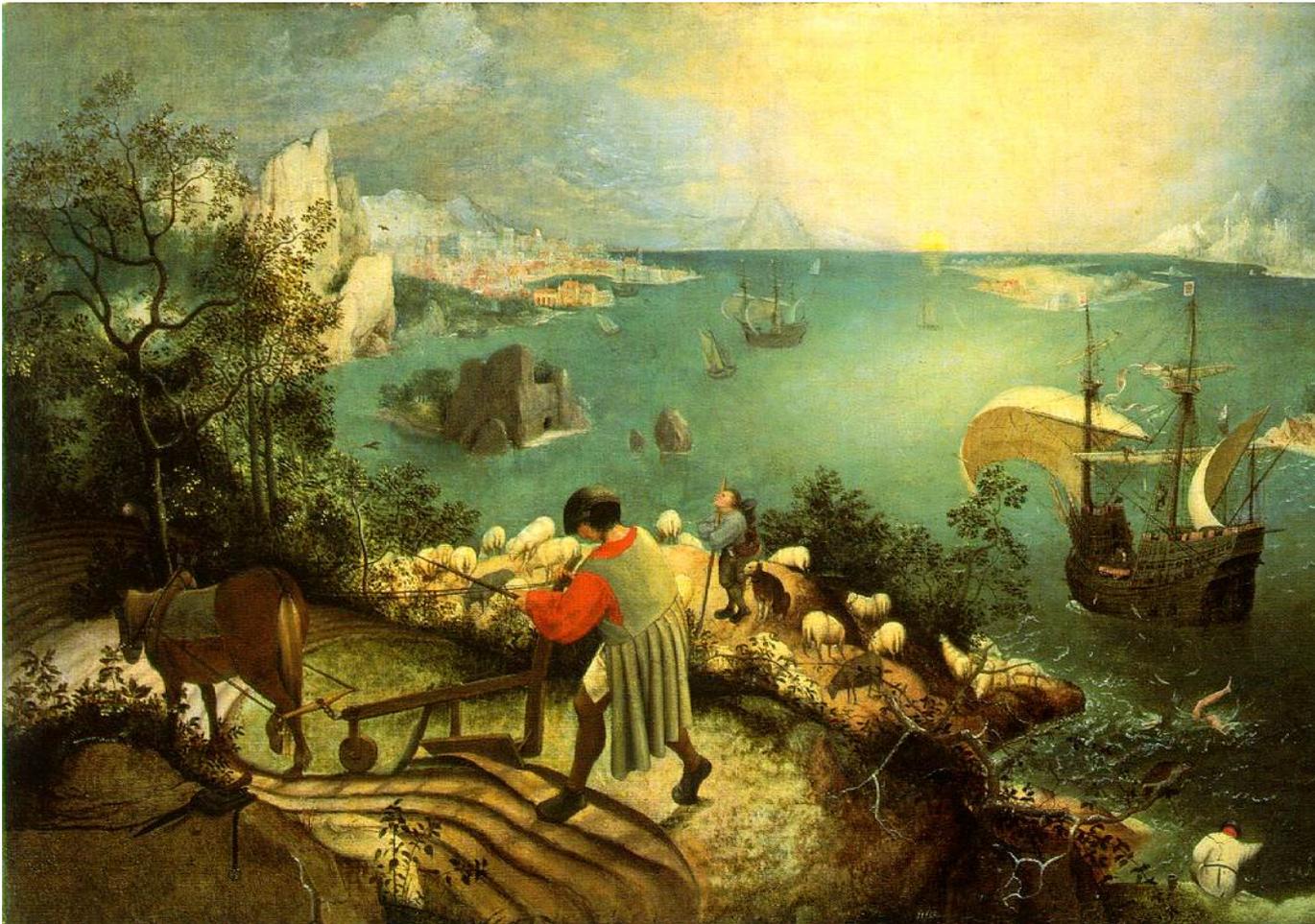
性に繋がっているといってもよいように思える。何とも魅力的な静かな絵なのである。

この絵を居室で眺めていて、“時”ということをし振りに考えた。年齢のせいかな近頃、“時間”が速く過ぎる。これまでも人生の諸先輩からこういう感想は何度となく聞かされていた。なぜなのか？ 以前、本川達雄著の「ゾウの時間ネズミの時間」(中公新書)を読んで動物の時間についていろいろおもしろいことを知った。それによると、われわれ動物の体は、器官によって細胞の形は違うが、ほぼ10ミクロン(0.01ミリ)の大きさの無数の細胞から成っている。この大きさは、ネズミでも人間でもキリンでも違わないらしい。つまり、体の大きさの差は細胞の数の差と思えばよい。そして面白いことは、動物が活着している間に使う単位体重当たり(したがって一つの細胞当たり)のエネルギーはほぼ一定の約15億ジュール/kgとのこと。逆に言うと、1kg分の細胞が約15億ジュールのエネルギーを生きるために使用すると、どの動物の細胞も一律にガタがくるということである。では動物間の大きな違いは何かといえば、それはそれぞれの生命を維持するために営まれている“生理現象の単位時間”にあるようだ。たとえば、心臓の鼓動の間隔を生理現象の単位時間であると仮に考えると、ネズミは数年の寿命ではあるが、この間の心臓の鼓動数は約20億回となる。したがってネズミが体感する寿命は20億単位時間の“生理現象寿命”であるということができる。一方、ゾウの寿命は約100年と長い、その一生の間の心臓の鼓動数は同じく約20億回であり、その生理現象寿命はネズミと変わらないことになるようだ。この一生の間の約20億回という鼓動数はどの動物にも当てはまるとのこと。したがって、中間サイズのわれわれ人間も例外ではなく約20億単位時間の生理現象寿命を持っていることになる。それぞれの動物は、われわれの思っている唯一の物理時間ではなく、そこに流れる独自の時間をもっているらしい。こういうことを知ると、この世に暫しの間、生まれてきた一生命体としてはなんだかホッとするものだ。

始めの疑問に戻ろう。その答えは、人間の成長過程と老化過程において“生理現象の単位時間”が変化しているためではなかろうか？と思う。例えば、子供の頃は前述の心臓の一回の鼓動が、体感できる生理現象の単位時間であったのが、20才台では二回の鼓動が、50才台では三回の鼓動が生理現象の単位時間となっているように。これは、年を重ねると細胞一つ一つの生理現象が緩慢になって、細胞ネットワーク全体の感度と時間分解能が落ちてくるためであろう。年をとると、みんな多忙になったせいで時間の経過が早く感じられると思っている。しかし、本当はそうではなく、少々独断的であるかも知れないが、前述のように年齢を重ねにつれて、人間はネズミ的時間から馬的時間を経由してゾウ的時間を経験しているのではなかろうか？ そう思えば、また楽しいし、各人を流れる時間をその人流に充足させることもできよう。

* * *

もう一つの絵「イカルスの墜落」(
<http://www.oir.ucf.edu/wm/paint/auth/bruegel/icarus.jpg>).



よく知られているように、ブリューゲルには庶民の生活を描いた作品のなかにも、不気味なもの、滑稽なもの様を描いた作品が多い。しかし、彼はあの時代にイタリアに大旅行をして、イタリアルネッサンス美術のこともよくわきまえていた教養人であつたらしい。この絵はスペインの統治下であつた時代に神話の主題を借りて、光に満ちた風景のなかに農夫を描いたフランドル絵画であると昔教わつたような気がする。海

の青い色彩のなかに、馬に畑を鋤きかえさせている農夫の赤い衣服が色彩効果をぐんと挙げている。不安のなかの平安、動のなかの静、不均衡のなかの均衡というような両面性を持つ。それでいて全体としてよく纏まっており、一種独特な”平衡感覚”というものを感じさせる。この絵の実物は1985年にベルギーのブリュッセル王立美術館で観た。ブリューゲルはこの絵では本当に平衡感覚のある、しかし不思議な感覚を生み出す絵を描いていると感心したものだ。この人のもっと有名な絵は映画「惑星ソラリス」で宇宙ステーションの中に飾られていた絵画「雪中の狩人達」(<http://www.oir.ucf.edu/wm/paint/auth/bruegel/hunters.jpg>)である。



これはウィーンにある。題を知らない人も絵を見れば”あっ、あれか”と思い出すだろう。これも SF 映画にでてくるくらいで、不思議な感覚を呼び起こす。と共に全体の均衡が驚くほどよくとれている。ブリューゲルの絵の多くからはそういう独特の平衡感覚の重要さを教えられ、その絵を観ているうちに「なぜ自分という人間がここにいる、こういうことを考え、行動しているのかという存在の不思議さ」を想い起こさせてくれる。

”平衡感覚(又はバランス感覚)”, これは動物でも人間でも生まれながら持っている素質の一つであろう。しかし、これが健全に育つこともあれば、逆に過度の競争やストレス、さらには欲ボケによって著しく喪失してしまうものでもあるらしい。最近の新聞紙上を賑わせている出来事などから、それがよくわかる。こういう平衡感覚は人間個人個人の品格に反映されるだけでなく、街並やその時代の特徴などにも現われるのではなかろうか。例えば、パリの街並は、初めて訪れた1982年以来、何度か訪問しているが、今も雰囲気は少しも変わらない。一方、たまに郷里の町に帰省すると、昔親しんだ街並が無残にも変わり、商店街や家並に昔の面影がなくなっている。人間には(人間社会にも)”時”を思い出すため、ものさしになる変わらぬものが必要なのではなかろうか。パリはそういう変わらぬもの、例えば古い建築物や街並といったようなものを何とか保持している。

最近、仕事でパリに立ち寄ったとき、早朝にモンパルナスのホテルからルクサンブール公園まで歩いた。公園のベンチに腰をかけると、小鳥のさえずりがマロニエの木立より聞こえてくる。初めてパリを訪れたときもこうだった。そして、街並も変わらない。それがうれしく、また”移り行くものは、時間を知った人間だけ”と気付く。このことは大事である。アメリカではどの街に行っても、忙しさのためであろうが、このような感慨にふけることは少ない。パリを始めとするヨーロッパの古い街には今の日本やアメリカのように、新しいものだけを追いかける軽薄さはないようだ。少なくとも、そこには変わらぬものがあり、人生を考えさせてくれる。数10億年かけて一細胞から人間への進化をしてきたわれわれ人類は、この数千年のあいだ人間の社会システム作りの壮大な実験を行っている。そのなかで、”時”が経っても変わらぬ価値あるものを創り出せばそれでよいのだろう。そのためには一人一人”自分なりの平衡感覚”を磨かなければならない、というようなことをルクサンブール公園の中で思ったものだ。

* * * *

さて、私の居室にある二つの絵を眺めつつ、この雑感を書いてきて思い至ったこと。それは「本当に”平衡感覚”のあるものは”時”を深く考えさせてくれる」ということであ

った.

===== 筑波大学フォーラム第50号(1998)より

(第1小節*のみ修正, 及びwwwアドレス追加)=====